台北植物園の蓮池の近くに平屋の木造建築がある。これは、日本殖民地時代の昭和初め頃（1930年代）に建てられたものである。当時の地籍資料によると、この建物の位置は「台北州台北市南門町六丁目323番地」となっている。建物は戦後、林業試験所の宿舎として使用されていたこともあったが、昔を知る職員も退職し、時間とともに忘れ去られ、荒廃のまま取り残されていた。取り壊しの計画が持ち上がっていたが、この建物の調査と計画及び設計に当たった郭中端と堀込憲二両教授のご協力の下に、建物の復元修理が行われ、昔の日本式建築の姿を取り戻した。周囲には、新たに松の木類の展示を主体とした枯山水式庭園を整備し、訪れる人々に過日の風光が楽しめるようになった。

開園時間

毎週火曜日～日曜日、午前９時～午後４時半
休園日：月曜日、旧正月及び祝日

参観時のご注意

1. 入園には人数制限がございます
2. 喫煙及び飲食はご遠慮ください
3. 館内及び庭園の参観は 、解説員の案内に従ってください
4. 園内では 、建物や花木 、 石 、 砂などに触れないでください

交通案内

バス利用

1. 植物園站：和平幹線、1、204、242、624、630、907、藍 28
2. 三元街口：204、630
3. 建国中学（国語実小）：1、204、630
4. 建国中学（歴史博物館）：1、204、630

ＭＲＴ利用

小南門站下車、３号出口より徒歩。
植物園の博愛路口からの入園が便利です。

発 行 者｜黄裕星
編 著 者｜朱麗萍 、 董景生
日本語訳｜堀込憲二
住　所｜台北市中正区南海路 53 号
電　話｜02-2303-9978
ＵＲＬ｜www.tfri.gov.tw

台北植物園 Taipei Botanical Garden

PRINTED WITH SOY INK

南門町三二三
NANMON-CHO 323

林業試験所パンフレット第 133 号

南門町三二三

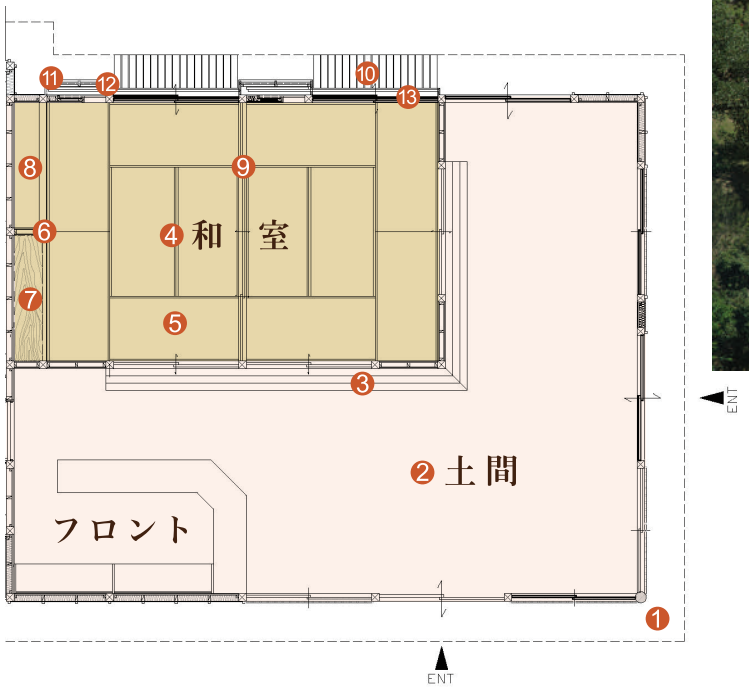
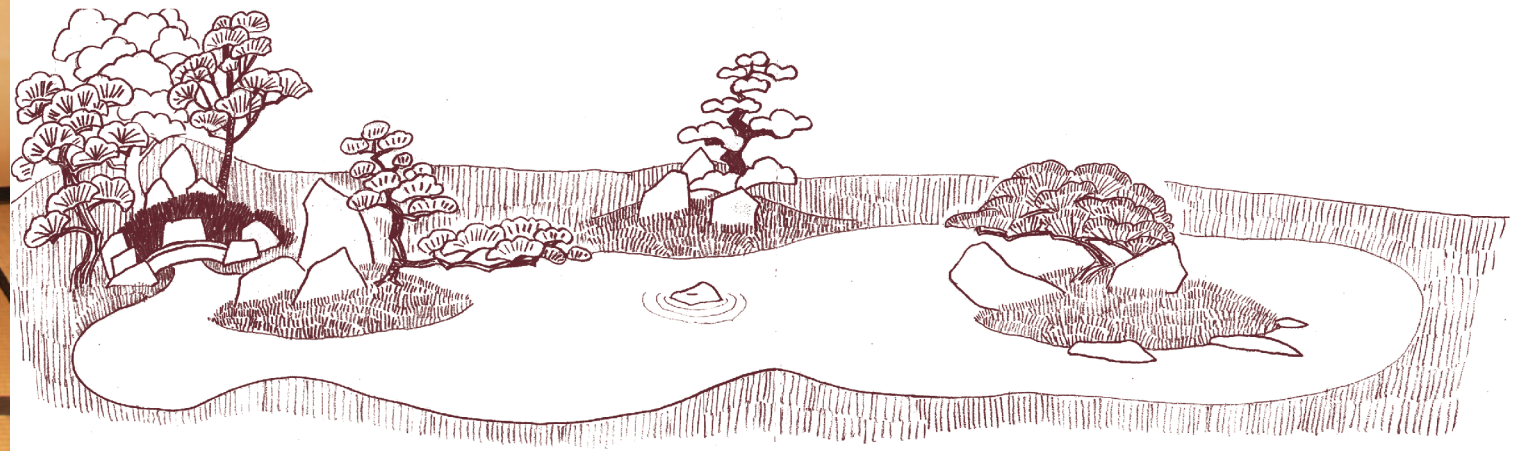
建物の外観は、台湾各地に残っている日本式宿舎建築によく似ている。しかし、内部にはL字型の土間があり、一般の宿舎には見られない間取りである。このため植物園内での特別な用途の建物だったと考えられる。土間に囲われた和室は、日本住宅の伝統様式の一つである書院造(しょいんづくり)を採用し、襖で仕切られた畳敷き六畳の2室がある。奥の六畳には床の間と床脇が備えられ、客を迎えるしつらいがあり、2室の六畳間は襖を開け連続させることで十二畳の部屋として使用することができる。外壁は下見板張り(したみいたばり)で、雨戸、戸袋なども備えている。

庭園は、日本長野県の庭園研究家で作庭家の小口基實先生にお願いし、日本庭園の代表的様式の一つである枯山水庭園を設計した。枯山水庭園は別名禅の庭とも言われ、石を立てて組み山や地形を表現し、白い砂で水を表現している。一部の花木以外は花の咲く草木を用いないのが基本で、静止不変の設計元素で構成し、見る人を静かで落ち着きのある心理状態へ誘う。枯山水庭園は日常の樹木の手入れのほか、日々白砂の上に「砂紋描き」(さもんがき:熊手の一種)を使い、砂紋で波、渦、流水の水の姿を象徴させ描いている。白色系の落ち着きのある砂紋に芝や松の緑を調和させ、素朴で清浄な禅の庭を創り出している。さらに庭奥から正面には枯滝の三尊石(さんぞんせき)から連なる遠山と石組によって蓬莱山(ほうらいざん)を表現し、これを背景に向かって左に鶴島(つるしま)、右に亀島(かめしま)を配し「鶴亀蓬莱の枯山水庭園」(つるかめほうらいのかれさんすいていえん)としている。

本園区は、現在園内のボランティアや植物愛好団体の人々の協力のもとに維持管理が行われ、各種の植物教育推進運動及び展示会なども行っている。本建築は将来、植物園を訪れる方々の休憩のための茶店(ちゃみせ)としての利用なども計画している。

NANMON-
CHO 323

建築空間の解説図



1. 犬走り（いぬばしり）
2. 土間（どま）
3. 上がり框（あがりがまち）
4. 和室（わしつ）
5. 畳（たたみ）
6. 床柱（とこばしら）
7. 床の間（とこのま）
8. 床脇（とこわき）
9. 襖（ふすま）
10. 濡れ縁（ぬれえん）
11. 戸袋（とぶくろ）
12. 雨戸（あまど）
13. 障子（しょうじ）